



TITLE:

會報

AUTHOR(S):

CITATION:

會報. 天界 1933, 14(152): 45-45

ISSUE DATE:

1933-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165454>

RIGHT:

る神話である。Halley が1705年に其週期性を發見した所のハリ彗星は、間違ひなく1759年と1835年とに現はれた。其間に猶ほ多數の週期彗星が發見された。次いで伊太利の Schiaparelli や奥太利の Oppolzer は二三の流星群の軌道を計算することにより、それと或る週期彗星との間に密接な關係あることを示した。それ以來、流星と彗星とは分離し難いものとなつた。

11、寫眞術の應用 Daguerre は天文學者ではなかつたが、寫眞術を發明した時、早くもそれを天體に應用して見たと云ふことである。其後多くの人がそれを試した結果、効果は益々増大した。星霧や彗星の尾の如き微弱な光の天體には特に有効である。肉眼では見られない組織が寫眞術の應用によつて判明するのである。肉眼では視ることの出来ない微星も長い時間の露出によつて寫し取ることが出来る。多數の恒星を一枚の乾板に寫して各個の位置を精密に測ることも出来る。一二時間の露出によつて太陽系内の天體を容易に恒星と區別することも出来る。猶ほ又星像の大さと黒さによつて光度を測ることが出来る。天文學に於ける寫眞術の應用は實に夥しいものである。

會 報

總會延期——開催地の都合により來春まで延期された。

十月例会——去る十月十七日午後三時より花山天文臺にて開催。山本博士の「遊星面の觀測法」は専門觀測者達への珍しいプレゼントであり、目新しいヒントとなつて、熱心に傾聴された。

十一月例会——恒例の獅子座流星群出現極大時を目前に控へた同月十二日、花山天文臺で、流星天文學の公開講演會が開かれた。定刻に集ふ者數十名、老いたる人、若い者等が入り混つて、山本博士の「流星を語る」の題下に天上の神秘流れ星の由來を尋ね、佳境を滿喫して、日暮の迫るのも忘れた。

編輯が全く變つて、十一月號以來の「天界」が如何に讀者諸氏の御氣に召したか、御知らせ願ひたい。どんな御意見でも、よろこんで拜讀します。

星辰の送迎、光陰の流れ、早くも繁忙の昭和八年を終へる。これでも常に多くの會員讀者を忘れぬ「天界」誌人で、盡力して來た積りである。非常時と銘打つたこの世だけに「天界」も大いに新裝して今後に見える事になつた。幸に「天界」は會員諸氏の支持多大である今後も相變らず御愛顧願ひたい。會費拂込遅延は事務上最も痛傷とする處、御忘れなくは**會費拂込を後れぬやう**。會報予も一先づこれで筆硯を新たにして明年を迎へん。終りに諸氏の御壯健を祈る。